
二人の短編集

でんでん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の短編集

【著者名】

でんでん

【あらすじ】

「哀、新志の短編集。

昼休み（前書き）

キターニー 短編集（^v^*）ノ
とまあ調子に乗っているAsuです。

昼休み

ある休みの口下だった。袞は歩美と喋つていふと、隣のクラスの二〇・一にもてる有川優に呼び出された。

「あの、灰原さん。僕と付き合つてもらえませんか?」

哀
レ
ナ
ト

哀は失礼ながら、速攻で告白を断つた。当たり前だ、自分には江戸川君がいる。小さくなつた頃からもう、5年がたつた。その間、ずっと想つてきたのだ。

哀「それじゃ。」

そのまま、灰原は去つていった。

あの後、少年探偵団のグループで帰っていた。哀はコナンの横顔をジ――――つと見つめていた。そして小さくため息ついた。

哀「素直になれたらね。」

いのまわし（福島県）

二十九三線でや（ ^ ^ * ）

コナン「なあ、灰原あ。」

哀「いや。」

コナン「何もいってねえし。」

哀「どうせ、昼飯作つてー。とでも言つんでしょう。」

コナン「…正解。」

ある日の昼下がり。灰原はいつも様に何でも俺の事を見透かしてくれる。

しばらく俺が見つめていると、灰原はため息をつきながら立ち上がった。

やつぱり灰原は優しい。いつからだっけ、こんな灰原を好きになつたのは。守りたくなつたのは。

初めて泣かれた時にあつた気持ちがそのまま大きくなつて今に至る。気づいたのは、組織を倒して解毒剤が出来た時だつた。

コナン「なあ、灰原あ。」

哀「何? 私今忙しいんだけど。」

コナン「…なんでもない。」

この気持ちが伝えられたら。どんなに楽か。少し勇気を振り絞つて、伝えてみつかな。

今度。

彼女の瞳（一）（前書き）

何か前後編になりました（^-^）
すみません（ノ_・_）

彼女の瞳（一）

組織を倒して解毒剤を飲み、俺は工藤新一に戻った。灰原も宮野志保に戻って、味わったことのない高校生活を楽しんで（？）いる。

解毒剤を飲んだ後に蘭に告白した。俺が「ナンだつたつひとも話した。

その事を宮野に話すと、「よかつたわね。」と言つてくれた。しかし日の日からだった。宮野がどことなく悲しそうな瞳をし始めたのは。

蘭「ねえねえ新一！今度トロピカルランに行こうよ」

新一「ああ。」

俺が蘭と話しているとまだ。またアイツが悲しそうな瞳をしている。

そんなアイツを見ると胸が苦しくなる。俺には、蘭がいるの……どうかしてる。宮野の事が気になるなんて。

新一「なあ、宮野。」

志保「何よ。」

新一「おめえ何でそんなに悲しそうな顔をしてんだ？」

志保「貴方には関係ないわ。」

喋りかけても、ほひ。悲しそうな瞳をしている。そんな悲しそうな瞳すんなよ。

あの日をしてこの宮野を見ると、何か守りたくなる。蘭には抱か

ない感情が沸き上がりてくれる。

ああ。何でか分かったかも。俺、宮野の事が好きなんだ。

彼女の瞳（11）（前書き）

続やでや／＼（^—^）＼

彼女の瞳（一）

俺が富野を好きと気づいた日から、一日後、俺は蘭を呼び出した。

蘭「新一…？話つて？」

新一「蘭、別れてくれ。」

蘭「！」

新一「他に守りたいやつが出来たんだ。いきなり、悪い。」

蘭「新一…。その人、志保さんでしょ？分かるよ、なんとなぐ。」

新一「ああ。」

蘭「仕方ないね…。新一が志保さんを好きなら。」

蘭はやつぱり優しい。俺のこと、ちやんと分かってくれてる。

蘭「志保さんの所、いかないでいいの？」

新一「ありがと、蘭。」

それだけ言って、俺は走り出した。富野のもとへ。

新一「宮野！-！-！」

志保「何よ。つるさいわね。」

新
—
俺、宮野の事が好きだ！！！」

言つた。すげえ勇気が必要だつたけど。

志保「蘭さんは？」

新一
ふた
」

新一「俺はおめえが好きだ。」

志保「私はそりじやなきや困るかどね？」

新一
はるか

志保「あたし、貴方のこと、灰原哀の頃から好きだったもの。」

今
河
口
書
記
?

み、富野が俺のこと、好きって？？顔が熱い。きつと俺、今顔真っ赤だ。

真っ赤な顔のまま、俺は宮野を抱きしめた。

何か……ベリーパー。

黙文で、すみません（ノーノー）。

チャタラ（繪畫）

何かアカン。つていうか雛花さんとの何か似てます。すみません（

ノ＼・＼）

パクつた訳じゃないんです（泣）

暗い部屋の中で涙を流している青年と静かに笑っている女性がいた。
そして青年の手の中には銃。
矛先は女性のこめかみだった。

いつもの様に博士の家でくつろいでいた新一は志保に甘えていた。

新一「志保お。」

志保「そういうえは貴方、今日どうするの？嫌つて言つても止まつて
行くんでしようけど。」

新一「当たり前。」

志保「じゃあ、着替えとつて来ておきなさい。」

新一「めんどい…。」

志保「別にいいのよ？私のどびっきり女の子らしい服を貴方に着さ
せても。」

新一「いってまいります。」

新一は即座に立ち上がりて着替えを取りに行つた。

新一が自分の部屋に来ると、人の気配を感じて後ろを振り返る。
そこには蘭がいた。

新一「おう。蘭どうした？」

実は新一は先日蘭を振つたばかりでそれ以来喋つていなかつた。

蘭「新一に復讐しにきたの。と言つても新一を殺す訳じゃないよ？」
新一の最愛の人を殺しに行くの。」

蘭は淡々と話していく。これが幼なじみだった蘭…？新一には信じられなかつた。

新一「蘭…？」

蘭「でもそれじゃあつまんないよね？だから新一、志保さんを殺してきて。」

新一「無理だ。」

蘭「可哀想に。子どもたちと博士の命を無駄にするんだ？」

新一「…」

蘭「はい、拳銃。子どもたちと博士、守つてあげなよ…？」

そのまま蘭は出ていった。俺は脱力していた。志保を殺せだと？無理だ。しかし子どもたちと博士も見過ごせない。やつぱり志保を殺さなければならぬのか。

新一は重い足取りで博士の家に戻つた。

志保「遅かつたじゃない。何かあつたの？」

新一「子どもたちと博士が人質にされた。」

志保「え…。」

新一「要求に答えないとならなくなつた。」

志保「要求は？」

新一「俺が…志保を殺さなければならぬ。」

志保は一瞬驚きの色を見せたが、すぐに静かに笑つた。

志保「それなら早く殺しなさい。」

て その言葉で新一は泣きながら銃口を志保の「めかみに当てた。そし

バ
ア
ン

銃声が部屋の中に響き渡つた。その音と同時に志保は崩れ落ちた。

志保「サヨ...ナラ...。」

志保はその言葉を発した後、帰らぬ人となつた。

新一「志保おおおおおおおーーー！」

その後、新一はずつと泣いていた。人質が解放されたと知つても、蘭が捕まつたと知つても。新一はずつと泣いていた。

サヨナラ（後書き）

新一
…可哀想。

愛しい君へ（前書き）

コナンから哀ちゃんへラブレターです（笑）
コナン君、ヘタレ————！

愛しい君へ

灰原へ。

おめえ、俺の気持ち知らねえだろ？

つて言つても俺も最近まで気づかなかつたんだけさ。

俺、前まで蘭が好きだと思いこんでた。でも違つたんだ。
俺は、灰原が好きだ。

俺、おめえのこと、守つてやつから。
だから、逃げんじゃねえぞ。

コナン「俺はバカか。」

コナンは書いてて馬鹿馬鹿しくなつた。
最近、灰原がやたらキレイになつてきて、置いていかれそうだ。それで、我慢が出来なくなつてきて、告白といつ結論になつたんだ。

やつぱり手紙より、直接言つた。

k i s s (前書き)

授業中に適当に書いたやつです。
ちょっと見苦しいかも…。

コナン「灰原。」

哀「『めんなさい』。本当に……『めんなさい』……。」

彼女は泣いて謝つてくる。何度も何度も、別に、謝らなくていいのに。解毒剤なんて必要ないんだ。灰原の隣にさえいられれば。

今日、灰原に呼び出され、解毒剤が出来ない体質になってしまったと告げられた。もちろん俺は少しショックを受けた。けど、少しだ。

コナン「いいよ、灰原。」

哀「ホントに……『めんなさい』……。」

コナン「なあ、俺、別に元に戻らなくてもいいんだよ。」

哀「えつ？」

灰原は涙で濡らした顔をあげた。その顔はとてもキレイだった。

コナン「俺は元に戻れないより、灰原が隣にいねえ方が辛えかな。」

哀「それってどうこいつ……」

コナン「こいつことだよ。」

俺は彼女の唇に自分の唇を重ねた。灰原の顔はみるみる赤くなつていいく。

コナン「俺はおめえが好きだ。」

哀「う……そ。」

「ナン」「本当だよ。」

哀「うそつーそんなの氣の迷いよ。だいたい、蘭さんはどうしたのよ?」

やつぱり、そう思つか。

「ナン」「俺は、蘭のこと好きだった。もう過去形だよ。」

哀「あんなに元に戻りたがつてたのに…。私が、私の存在が、貴方達二人を引き離してしまったのね…。」

悲しそうな瞳をする灰原。なんで…。何でそうネガティブに考えるんだよ。俺は…もう灰原しか考えられねえのに。

「ナン」「バー口一。おめえのせいじゃねえよ。」

哀「貴方はどこまでも優しいのね…。でも私、貴方のそういうところ、嫌いじゃ無いわよ?」

「ナン」「逆に好きだろ。」

哀「貴方は自惚れ屋なの?でも、そうかもね?私、貴方のこと、大好きだから。」

は…?

「ナン」「マジで…?」

哀「一回も言わないわよ。」

嬉しそぎて、俺は灰原を抱きしめた。

哀「えつ、ちよつと…!…」

声は抵抗しているが、満更でも無さうだ。その後、どちらともな

く、一回田のキスをした。

kiss (後書き)

誤字の指摘、お願いいたしますー(^__^) /

なれ（能れ）

ほのやんの思ひです。

お願ひだから優しくしないで。

貴方の優しさが犯罪者の私には辛々さるのよ。

どうして私を助けてくれるの？私なんかほつとけばいいのに。貴方
が大切なのは蘭さんでしょう？

バカじやないの？

どうせなら罵倒してよ。ひどいからいいよ。

その方が私としてはよっぽど氣が楽なのよ。

貴方の優しさは只の空回りなのよ。無駄なことなのよ。それがわから
らないの？

それなのに……どうして？どうして私なんかに優しくするのよ。

貴方の優しいから私は江戸川君を好きになっちゃうのよ。

お願ひだから……お願ひだから優しくしないで。

切なさ（後書き）

遅くなつてすみませんでした(ノ_・。)誕生日でテンションあがつてて(。口。)

「志保お…ひ「私は暇じゃないんだけど。」

「腹へつ「お腹空いたなら蘭さんの所に行きなさい。」

「志保が作つ「言つとくけど、私は作らないわよ。」

「…」

只今、志保はすく機嫌が悪い。何でだつけるなんか悪いい」としてか、俺…。

「何でそんなに機嫌悪いんだ?おめえ…。」

「自分で推理すれば?彼女より事件が大好きな名探偵さん?」

志保の言葉はどこか刺々しい。そりやそりか…。『テートまつたらかにして事件ばっかり行つてたもんな…。』

ん?

俺は口角を上げて志保に聞いてみた。

「もしかしておめえ、事件にせきせきやいてんのか?」

「なつ…一ち、違つわよ…。」

真っ赤になつて反論する志保…図星だな。俺はニヤリと笑つて志保を抱きしめた。

「おめえ、かわいいな!」

「 はあ ？」

そのまま強く、志保を抱きしめ続けた。

「はあーー。」

と、ため息を一つ。志保はやつぱり今夜もまた部屋を出でてしまった。ケータイのワンセグだつて何も笑えない。只つまらないことをしてるだけ。

窓から見える工藤君と蘭さんのキスシーン。

誰のせいでもない。別に優しかつたあの人なんて、もういなくても平気。みたいな顔ですましてるけど、そんなわけない。あの二人のツーショットから目をそらしただけ。

街の中を歩いていくと、人とぶつかつた。志保の荷物はすべて飛び出す。慌てて荷物を拾うとケータイの待ち受けには笑顔の二人がいる。

そのまま操作をするとお互いの名前^前が入つたメアド。二人の中を繋ぐのはこれだけ。だから、忘れようと削除の操作をすると手が止まる。どうしても消せない。

哀の頃は、いつも肩肘をはつて、強がつて生きてた。
弱い自分をみられないように。彼への想いを心に並べても未完成なパズルのようで。どこか足りない。

当たり前のようにずっと傍にいた。志保としてはそれで十分。それだけでよかつた。

思い出すだけで涙が出てくる。

きっと蘭さんはすべてのピースが揃ってる。

私には…足りない。私に足りないピースのたった1つを見つけたい。

そうパズルね。

p u z z l e (後書き)

倉木麻衣さんのpuzz1eですー(^__^) /

キヨリ 哀バージョン

わからぬでしょ？ ね。 ト藤君には。
私が貴方を愛してゆつていつ事実を。

気づいてないでしょ？ 私がずっと貴方をみてる」と。
気づいてないでしょ？ ずっと貴方の隣で笑つていたいつていつ想
い。

この気持ちが伝えられたら… どんなにいいか。
でも許されないことなのよ。

犯罪者にさせなんて あつてはならない。

それに、貴方には蘭さんができるでしょ？
だからあつと、 いのキヨリがちょいびっこなのよ。

もづ、 これ以上なんて望まない。 蘭さんとト藤君のために。

それに、私はこのキヨリでいたいから。そのまゝあと……

キヨリ 哀バージョン（後書き）

誤字の指摘、お願ひいたします／（↙_↗）／

キヨリ ハナンバージョン (前書き)

ハナンバージョン ハドウ (へ ー へ) -

キヨリ ナンバージョン

わからねえだろ？灰原には。

俺がおめえを愛してるっていつ真実を。

気づいてねえだろ？俺がおめえをずっとみてること。

気づいてねえだろ？おめえの隣で笑っていたいっていつ想い。

この気持ちが伝えられたら…。どんなにいいんだろう？でも、ダメだ。

俺がこの気持ちを伝えたら灰原はきっと苦しむ。そんなのみでいられねえ。

だからきっと、このキヨリがちょうどいいんだよ。

辛いけど、もう、これ以上は望まない。灰原のために。

それに、俺はこのキヨリでいたいから。

「志保お？ただいまつと。」

新一は何の躊躇もなく阿笠邸にあがりこんだ。リビングを覗くと、目当ての人はいた。

すうすうと規則正しい寝息をたてていた。

すっげえキレイな顔。ヤバい、かわいい……。

新一は見惚れていた。

白い肌に長いまつげ。整った顔立ち。

「ん、」

起きるのかと思い、新一は後ずさつた。志保は寝起きがかなり悪い。

しかし、その心配はなかつた。

「工藤君……。」

「えつ？俺？」

「愛してる……」

新一は一瞬驚いたが、すぐに笑顔になつた。

「俺もだよ。」

小さく呟き、黙つてゐる志保のおでこにキスをした。

そのタイミングで志保が起き、薬の実験台にされたらしく……。

隣の彼

隣の彼はいつも寝てる。何でかいつもを向きながら。

今は六時間目、数学。いつもは寝てこりの彼のことなんかほとんど無視。でもなんか今は…彼を見つめてしまつ。

白い肌、長いまつげ。すこしく整った顔立ちをしている。少しほねている髪も、なんだかかわいい。

あつという間に放課後になつた。彼はまだ寝ている。教室は私と彼の二人だけになつた。

「起きなさい、工藤君。放課後よ。」

揺さぶつても起きやしない。…ちょっと位、はめをはずしてもいいんじやない？

少しづつ、彼の顔に顔を近づけていく。その瞬間、工藤君と目がつた。

「ん、宮野？」

「…」

少し後ずさつた。そして冷静になるように努めた。彼はそんな私に気づかず、ニヤリと笑つた。

「おめえ、今俺にキスしようとしただろ？」

はめなんかはずさなければよかつた。顔が熱い。いつものポーカーフェイスはどこへやら。

「ま、いいや。これで遠慮しなくていい。俺も好きだよ。」

彼があまりにも真剣な目で見つめるから。少しづつ鼓動が高鳴つていいく。

私が固まっていると彼に抱き締められた。もう、全身が熱い。でも、もう少しだけ、彼に身をゆだねてもいいかもね。

そのまま一人は抱き締めあつていた。

あの蒼い月光（前書き）

お久しぶりです／＼（＜－＞）＼
月夜の悪戯の魔法をもとにした小説です。

新 快志です。

あの蒼い月光

暗い暗い部屋の中、新一はふと、空を見上げた。思い出すのは、今日と同じ蒼い月光だったあの日。

組織を潰して俺は工藤新一に、灰原は宮野志保にそれぞれ戻った。その時にはもう、俺は宮野に恋をしていた。ずっと守りたいと思った。

その後、俺は学校に復帰して、宮野は転校してきた。はじめての高校はそれなりに楽しいみたいだ。

蘭はふつた。復帰してからすぐに。宮野が好きだとも言った。すべてを話した。

蘭は笑つて俺の恋を応援してくれた。やつぱり、蘭は優しい。

最高の幼なじみだと思った。

その直後、綺麗な月が出ていた日に俺は宮野に告白した。

「ごめんなさい。灰原哀の頃は、ずっと好きだったわ。でも、今は他に好きな人がいるの。とっても優しくて、温かい、頼れる人が。」

この返事は俺の胸をズタズタにした。口ナンの頃からずっとあった
思いだつたのに。伝えていれば、何かが変わつた？

「もしかして…黒羽？」

「そう。来週には、一人で暮らすつもりよ。だから今日が最後にな
るかもね。 サヨナラ、上藤君。」

手をふつた後ろ姿。あまりにも綺麗で。俺は動けなかつた。
なによりも黒羽が羨ましかつた。あの日、富野を連れ去つたのだから。

宮野はいつも影に囚われていた。その闇を救つたのは黒羽だったんだ。それが俺だったなら。よかつたのにな。
新月が闇に潜むように宮野の姿が見えない。
あんなにも近くにいたのに。

頭の中を占めるのは

どうしてだろう。最近灰原が気になる。
中学一年生になつた俺らは、今日が入学式。横にセーラー服姿の灰原。

可愛い過ぎだろ。

前まではなんともなかつたのに。
ただの目付きが悪い欠伸娘としか思つてなかつた。

でも、いつからだつけ？

灰原を守りたいと思つたのは。灰原の存在がこんなに大きくなつて
いたのは。灰原がいないと、こんなにも胸が空っぽになるのは。灰
原に告白する男子にどうしようもなく嫉妬してしまうのは。

俺つて灰原が好きなのか？

頭の中を広めるのは (後書き)

自分の気持ちでござったコナン君。

素直になれない

中学校からの帰り道。

哀は河川じきをぶらぶらと歩いていた。いつも一緒に帰っている人コナンは今田は部活だ。

ボーッとしていると後ろから声をかけられた。

「あら。哀ちゃん。」

「蘭さん…。お久しぶりね。」

毛利蘭。去年、新出さん結婚した。相変わらず、キレイな人だった。

「コナン君と上手く行つてる?」

「私は江戸川君なんか好きじゃありません。」

「素直になりなよ、哀ちゃん。つて、用事で急いでたの忘れてた!
じゃあね。」

嵐のよつと去つていった。

素直になんかなれないわよ。

どうせ私はひねくれものだから?

でも、ちょっとからかい半分でならいいかもね。
やつぱり私は素直になれない。

素直になれない（後書き）

イニフーズ。

信じいいの?

貴方は優しい。

どうしてそんなに優しいのかしら? 私なんかのために。

こんな私でも守ってくれる。

でも時々、時々だけ、その優しさが信じられなくなるの。

裏切られるのか怖いの。

人の暖かさを知ってしまったから。

ねえ…、工藤君。私はその優しさを、信じいいのかしら?

貴方の優しさを同情じゃないって、信じいいのかしら?

貴方も私と同じ気持ちかも知れないって、信じいいのかしら?

私は貴方を信じたいの。

ワタシハアナタヲシンジテイイノ?

何かが足りない

組織を潰して、俺は工藤新一に、灰原は宮野志保に戻った。

その1週間後、宮野は消えた。何の跡形もなく。

その日からだ。俺の生きる気力が一気に抜けたのが。

もつ何もやる気力がない。

俺にとつて宮野は相棒とか、運命共同体とかしか思つていなかつた。

でも、宮野がいなくなつてから氣づいた。

俺は、宮野を好きなんだ。

すべてが、遅かった。氣づくのが遅すぎた。

なあ、宮野。

俺の声が聞こえるのなら、この町に戻つてきてくれよ。

あの日から何かが、いや、お前が足りないんだ。

私は、私らしく。

「なーんてね。」

貴方は「」の言葉の意味をわかつてゐる?

分からぬでしょうね。貴方、鈍感だから。

貴方は悪戯してるとしか思つてないでしょ? つへ~

全然違つわよ。

これは只の照れ隠し。会つたこともなかつたことにでもゐるぢやない?

「貴方のこと、好きよ。」

「えつ?」

「なーんてね。」

ほひ。私はひねくれてるからひねなるの?

違う。私は只、弱いだけだ。思いを伝えて、「」の関係が壊れるのが

怖いだけ。

でも、これは私たちいんじやない?

私は、私らしく、ね。

俺は知っている。

灰原が毎晩寝ないで、解毒剤を作っていること。

無理なんかしないでほしいのに、あいつは優しすぎるから自分を放つておく。

なあ、頼むから無理しないでくれよ。解毒剤なんかほんとは要らないんだ。

灰原さん隣にいてくれれば。

お願ひだから、無理しないでくれよ。俺が、お前を守るから。運命共同体としてじゃなく、永遠のパートナーとして、な。

灰原、もとに戻つたら、俺が告白してやつから、
首長くして待つとけよ？

恋つて。

恋つて、 つらう。

組織にいた頃は恋なんかしたことなかった。

ハハん、 したくなかった。

今は彼に恋をしている。

叶つてはならない恋。 120%、 叶わない 。 だって、 彼には恋

だからかしら、 頭に変な方程式ができた。

恋愛 = 辛くて叶わない

あと、 もうひとつ。

恋愛 = 楽しい

ホントに、おかしな方程式。辛いと楽しいが一緒になんて矛盾してるとしか思わない。

きっと私は一生、彼に恋をし続ける。

傷ついても、叶わない恋だと、わかっていても。

お願い

お願い、ねばにこい。

そんなこと聞えないにせど、ホントに黙つてゐる。顔には絶対に出せない。

犯罪者が幸せを願つなんてありえないこと。だから言えない。いいえ、言つちやダメなの。ゼッタイニー。

貴方は…蘭さんのことばかりでしゃべるのやうなことばかり話すのだから。

その話を聞くのは結構つらいのよ。胸が張り裂けそうな位に……。

まあ推理にしか興味のない貴方だから、気づいていないでしょうね

ど。

もし、もし貴方が一ミリでも私のことを気にしてくれてるのなら

お願い、そばにいて。

特別なアイツ

会いたい。寂しい。

灰原が居ないと、いつもそういう想ひ。

あいつが隣に居るときが一番心地がいい。あいつが隣に居るときが一番自然体でいられる。あいつが隣に居るときが一番幸せ。

あいつが居ないと、物足りない。あいつが居ないと、無性に悲しくなる。あいつが居ないと、幸せになんかなれない。

蘭と居るときには絶対になかった、この胸に渦巻く想い。

灰原は俺の特別だと思つ。

灰原にとつてもそりであつてほしい。

特別は特別でも、同情とかじゃない。

俺は、灰原が好きだ。

渡さねえよ？

最近の灰原は、すごく綺麗だ。

高校に入学してからものすごく綺麗になつていつて、俺は、アイツに追いつけない。

10年前の姿から彼女は大分変わった。

あの頃から伸びている髪の毛はさらさらで、緑色の瞳は透き通つていて、相変わらず飯食ってるのか？ってくらい痩せていて。

それがアイツの魅力を引き出していく。

びっくりする位に大人びているアイツは、当たり前だが男子にモテる。

この高校の男子の9割はおそらく灰原が好きだらう。

しかも灰原は無自覚無防備。

だから簡単にどんなやつでも笑顔を向ける。

それに俺は確実に嫉妬している。

そんなやつらに灰原は渡さねえ。
俺が強くなつて、灰原を守るんだ。

大好き…いいえ、愛してる。

色恋沙汰に疎い工藤君は私の思いを多分知らない。

彼は蘭さんと事件しか頭にない。彼の脳内に私は居ない。

こんなにも切ない思いしたことない。

貴方のせいよ？工藤君。

貴方を、犯罪者の私が、愛してしまった。

この恋は、叶わない。違う、叶ってはならない。私の存在 자체がい
てはならないものなのに。そんな人が恋だなんて。

叶ってはならないのは当たり前。

神様、この恋は、ホントに叶ってはならないのですか

?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7302y/>

二人の短編集

2012年1月8日19時50分発行